

油揚をさらう鳶 (Kites)

工学研究科長 中野勝之

今回の執筆にあたり、高等教育統計データをダウンロードし、ユニバーサル化する大学・大学院の現状について把握してみた。基準年を定める目的で、自分が大学に入学した1964年と統計上最新の2007年のデータ、さらに学生部長として大学問題に関して考えさせられた2000年当時のデータを拾って学生数に関する現実をまず眺めてみたい。

1964年の国立大学の学部学生総数は211,310人であった。この数は1997年頃の50万人前後をピークに、2000年には495,458人となり、2007年には473,502人と減少傾向を辿っている。しかし、大学院生に学部生を加えた総数は2000年以降、国立大学では横ばいである。一方で、私大の学部学生数は1964年に583,040人であったが、2007年には1,979,972人に達し、2000年以降は横ばいである。国立大学は学部生を減らしながら、減少分だけ大学院生を私学から補充しながら生き伸びてきたことになる。大学院生数に目を向けると、2001年に国公私立大学の大学院生総数が1964年の国立大学学部生総数を突破し、216,322人となった。その後、微増し、2007年には262,113万人となったが、国公立大の約17万人に対して私立大学は9万人にとどまっている。このような大学院生の増員によって学生の総定員を維持する策も2007年の大学院生総数約26万人でピークとなったように見える。このように、「学生に来てもらう大学間競争」は大学院生に関してもほぼ決着し、あとは留学生となるが、これは、2000年に6万人程度であったものが、2007年には約12万人に達した。決して多い数ではないが、残された唯一の「成長株」と考えられ、これを巡って国際化（留学生30万人計画等）が叫ばれ始めたのが近況と思われる。ところで、国際化に関して、文科省が認めているように、大学国際ランキングで香港・中国のトップ大学が東大、京大に迫っているという。中国には、留学生の獲得

を目指し、教員の国際化に向けて海外教員比率を何10%にするなどの目標を掲げる大学が多い。国際化をアピールして質の高い学生を多く獲得しようとしているのである。学生数が固定してきた国内の現状に目を向けてみると、質的向上を狙った成長、すなわち量より質を高めるしか生き残る道はないと言えよう。グローバル化に向けて、国際化をアピールし、これを切り札として質の評価を高め、激化する「大学間生き残り競争」を勝ち残る戦略が重要となる。

日本国民が不慣れな国際化の波にさらされる21世紀、大学の新しい序列化に対応した構造改革が問われている。大学が学外に目を向けて、地域に貢献し、国際化を視野に「地域おこし」を支援し始める時であり、「グローバルなひと育て」、すなわちユーラシア大陸はもとより、世界の空を「ゆったりと舞う鳶 (Kites)」を育てることを人材育成の目標にする時期と考える。国際人脈を形成しうる若者を育てることが地域活性化に資することであり、アジアの環境・技術中心を目指す北部九州地域の活性化を促すことにつながる。若者が内向きになりつつある現在、アジア、海外からの優秀な教員を結集し新たな戦略を練る必要がある。若者の気持ちを海外に向けるようなプログラムを大学院教育の実質化を促す中で構築する時期が到来したといえよう。

気流を利用して「ゆったり省エネ飛翔」する鳶の視力は鋭く、動かない獲物も見逃さないのである。雲間を旋回しながら、遙かかなたの「大地に根を張るビジョン」を見逃さない。鳶は高空から目にもとらぬ速さで地にある油揚をさらう。油揚は大豆から作られる高タンパクの健康食品である。地味ではあるが栄養価の高い健康食品が有する「本物の味」を知っているに違いない。地下鉄福大前駅には角帽をかぶった鳶のシンボルが描かれている。今こそ、鳶の本質を知り、「油揚をさらう角帽鳶」を育てよう。